



畫本西遊全傳

三編

七



へ遠21
2500
40-27



門へ遠く
號2300
巻40-27

油漬



繪本西遊記三編卷之七

心主夜間修薬物

岳亭丘山譯

君王進上論妖邪

諸表行者の近侍小伴して皇宮内院入寐宮ふ到り門外ふ立て
二條の金線を官負ふ與へ教て是を聖躬の左の手寸脈腕脈尺
脈三部の上ふ著させ線の頭を格子より引出させ行者右の手小是
を撃左の二指を以て寸腕尺の三部の脈を誡と又教て右の手三部
小是を著させ行者左の手を用ひて件一是を誡と終ふ毫毛を
以て我身ふ返く高吉ぬ稟く々々の階下の尊惱左の寸脈強ゆ
て緊きり関脈備ふて緩尺脈沈ゆて沈と右の寸脈得ゆて隔ふ
や関脈遅ふて倍尺脈數ゆて牢きり以病驚懼と有る亦の愁
思ふ吉有て穢るる故きり是を名付て獲鳩供群の症とり國王是

繪本西遊記三編卷之七

を聞て満心の歡喜思ひにまじきと發して曰く休が看處誠の明るり
 早く薬を進めまほしと行者徐々として殿を下しを二藏行者を待
 構て君王の病を問行者曰く老孫国王の病を診脚一病根を悟り
 此故も国王我の薬を求めぬ疾く調て是を献ん此時一個の医官
 あり行者に向ひ長老今何様の薬種を用ひぬや要ら随ひて掣
 せん行者問て怎生二方小限ん薬を見を別ち用ひ何程めても把
 未だ二医官が曰く薬の都て八百八味あり一個の病の那ぞ盡く用ひ
 理有ん行者問て古人曾て云るまあり薬不執方合宜く用ひと此故
 ぬ全く薬品を記し然後加減まじく医官再度問答小及び薬品製煉
 の品を會同館へ送り遣り國王又三藏の勅して聖僧の殿中にお在
 て我と閑談しぬと止めるふ行者師父別して會同館へ飯を八戒

悟淨の夏の始終を説談三個晩齋を吃終つて半夜の頃小到り行者
 先一兩の大黄を取て悟淨の命と細末せしめ亦一兩の巴豆を取て熾
 膜を去槌めて油毒を去せ八戒の命とて細末ささくむ二個製し終
 りて行者一箇の花磁盃と八戒の奩へ此器小銅膺灰と半盃割
 け入てまぶへ八戒頭て銅膺灰を取来る行者又花磁盃を八戒の奩
 へは是を以て白馬の尿を半盃取まじく八戒尿を馬の尿を恚麼に
 ろや行者曰く薬を丸せんと答るるは悟淨笑て師兄病人も三弄と
 者ふと慰むや馬膺鮮くして脾虚の個一般這を喫時ハ乍ち小吐
 せん矧や巴豆大黄銅膺灰の類ひを交へ用ひをよの吐下ふは得に
 べ斯の如くして豈病の愈る有んや行者曰く我白馬尋常の馬小有
 此薬は是元東海竜神の化身なり他が便溺を用る時の本亦何なる病



らんともの愈さるるまで八戒是を聞て畢ひ白馬の傍に至り益を持て待
伺ひ平時をあり過せども馬更に尿をせし没奈何て立飯の行者は向
ひ大哥哥ら今帝土の療治をするまで止て白馬の療治を先にせよ這
斷乾造して一滴の尿も下さは行者が聞て歎子乱を止す然ら我が行
取まんと器を取て白馬の前に到り少時の間尿を取まり葉を撞つ
撞つ交て二粒の丸をとるる器を納め其夜の個々に歌を多く斯て大明
ろめ及んで国王と衆臣を宣ひひ你ら急ぎ孫長老ら方に到り葉を
受取まるる衆臣命を請て會同館に到り行者が見え拜して葉を
を求む行者が彼の丸を納めるる器を官に呈し葉を與へて曰く此の丸は是
鳥金丸と号す無根水を以て用ふ群臣曰く無根水との奈何なる
物ぞ我ら是を知ら行者曰く地に有る處の水悉く根有只天上よ

り降りて去り地に落る如の雨水見え無根水と名く群臣拜謝して朝
小飯と彼の丸を献じて行者が教を述す國王即ち當駕官を喚ぶ
雨を求むべき法を談しの以て會同館へ告し裁しの行者が
是を聞て急に印を結び咒語を唱す心を東の方より一の葉の鳥
雲一群起て會同館の上に到り雲中に有る東海竜王を敬し廣大
聖の宣ひに因りて葉を抑へ何の葉の幹支ありや行者曰く今も朱
國王病あり依りて葉を與ふ此の無根水を求んと欲を汝に賜ふ雨
を降して葉を與ふ葉を渡めよ竜神曰て曰く大聖の呼ぶに
依りて那の幹も弁へ入れ葉を雨を降しるる器一品も持たまらは行者
者曰く許す君の雨を求む非ず只此の葉を用ふ程有るる幹且
アとせ人竜神曰く既如斯我此の唾を吐て葉を用ひめん

會同館に三篇あり

行者満心歡喜最好々々竜王見之問て又烏雲を起し自王宮の上小到りて一口の唾と吐々々を化して甘露水となりて降下る宮中文武の官員後宮の官女ども是を見て手々小器を捧げ座上下立出て彼雨を受入る一時計中を都て是を一集ふて一箇の器小納る小許支の魚根水を得り國王歡喜で彼烏金丸を二度用ひりしを俄小腹中鳴響き泻下る支敷病根残らば下り終り此二の米飯を食し氣を養ふ小頃して心酌寛養して衛宮調和し脚力強健なり竜床を立て朝服を着て殿上小出二藏小見え身を倒して拜進し越早官員小命を行者が軍二個を宣ませ大小酒宴を安排して師徒四個を接待國王と初々と文武の百官后宮の官女都鄙の人民小到り逆數番の色止時なり行者重く老孫昨

日陸下の脉を診する小深く病の因を疑ふ是を審小詰兼古又を得や國王曰く家の醜の外小露をべうらと云つ然るも神僧の我命を救ひし人なり那ど覆匿人や寡人元来深く愛する處の金聖自王后と云ふ美人有三年前端陽の節我花園の裡小海榴亭と云あり爰小自王后と俱小角黍を食酒を吞で泉居るる小勿然として一陣の風吹起す一箇の妖怪現れ出自ら名宣て曰く我の是麒麟山の獬豸洞小居住する賽太歳大王とり小者るる小金聖自王后と兼美人なり又と問及び是を得んら為まらるる早く我小其自王后と兼美人なり與へざる時の先你を食ん其後二国の人民都て皆食尽さべと云る我其時命惜ふ有さるるも罪なき二国の人民を渠が為小亡されん支悲しく奈何とも可為やうる終小金聖を亭の外へ押出こ

沙汰彼妖怪乍ち白王后を世扱將つて我此為小驚愕るる言少く
夜又彼角黍の類ひ腹中ふ止滯り日皇王后の言を愁ひ思ひて日
夜是を亡心るる言又る此故ふ深く病を得て二年ふ及一死ふ神僧
の良薬を服して勿心ち病愈當下本身ふ復る言是皆唐僧の贈る
言行者聞て今金聖皇后を以国へ返一度との思ふれむや国王渡
を流して云ふや及ぶ我此言を田心ふ言切ゆて夜と無昏とる言
々々を意心思と絶間る然れども一個とて彼妖鹿ふ敵とる言
家る言行者聞て我陛下の為小此妖怪を退治し白王后を以国ふ
飯めを奈何国王是を聞て悄然あつた此国を休め讓り帝王
と稱し我の臣家と成ん行者又日妖怪皇王后を扱行て後一向ふ
音耗る言や国王曰く他先年五月金聖白王后を扱行て又十月ふ

到り兩個の宮女を白王后の宮仕ふ為と求る故又兩個の宮女を遣り
り去年又二月末て二個の宮女を要行七月重て二個を要去今年
二月亦末て二個の宮女を要去りて詞の本終る處小南の方
より一陣の風吹登りてさば国王初め文武の百官驚き慌得妖怪
又まじりと呼び叫び皆後宮へ逃匿る三藏の国王と俱れ身を
匿れ八戒悟浄も逃んとするを行者扯住め休少時爰ふ在て妖
怪を伺ひ見よと制さるる二個の没奈何行者と俱れ立定りて虚
空を眺んで立ちる處小乍ち黒雲の間小焦面陰暗の妖怪現る
る言行者二個ふ向ひ汝亦爰ふ在て待へ我先妖怪小對面せんと
勦斗雲小飛乗て空中小舟を舟とる

妖鹿寶放烟沙火

悟空計盜紫金鈴

却説行者の鉄棒を持て空中に立て大さ小喝て曰く你何里より
来しる妖怪ぞ彼妖怪色を励して曰く我の是別人なりは乃ち麒麟
山解多洞審大歳大王の部下の先鋒なり今大王の命を受けて爰に
て宮女兩個を把行て金聖娘々侍御せしめんとは抑又你の何
る事か斯妨逆を倣や行者答て曰我の乃齋天大聖孫悟空なり我
師兄三藏法師西天小往て仏を拜し徑を取らぬ路上此国を過る
死す你亦ら悪行を爲て片腹痛く此国小荷擔して退治せんと思
ふ死す然心々其方より来て我小命を送る不敏なりと呼ばる妖怪
大の小鬚有り有無を言は長き鎧を取て突てかゝるを行者の鉄棒を揚
相迎空中に在て戦ふ是二三合彼妖怪行者が棒と架外と長き鎧を
両截小折れ慌忙風小乗て西方へ逃去し行者曰て是を追ひ雲頭よ

つと下り来り叫て曰師父請陛下と同一く来り妖怪の逃去しと叫りけ
しは唐僧の君王を扶けて同く穴を出来て見を満天晴朗し絶
妖邪の氣を國王太子小歡喜すて筵宴を設け自ら玉璽を合掌金杯と
把て行者小進め神僧の妙方誠小感謝する堪ば行者杯を接て未
だ拈撥小及ざる處小乍ち告まる西の朝門の外小上火起ると行者
より持する金杯を酒有尽小穴中へ投上げしは雷的と音くと杯を
地小落ると國王慌忙く向て云大聖何ぞ杯を投身みや我死為小腹
らま有て煩心ると曰へ行者独笑て答は安然とて在る如小
又一個の官員来て報て曰當下西の朝門の起火俄小一場の大雨降来
て盡く消滅候然る小彼大兩街中を流る水都て尽く酒臭く候
いと云此時行者曰く是の彼妖怪西方小逃去しを我曾て他を



會天百字巴三編八



悟空雲頭
討妖怪

終之古法言三編之七

七

趕依て彼好怪火を起さるるの老孫國王の賜す一杯の酒を
投て即ち好火を滅し故より西の朝門の市街をも何の別条あり
んや國王十分惟喜猶百倍の敬を加へ三藏四個と宝殿ふ請上
らせ万望唐僧小国を譲ると天子と做んと云行者笑て曰く未
半々其如ふ到に彼賽大歳大王部下の好怪ども不交時押寄
来べし我今這方より逆寄して空中に於て擒み来ん不然の許交
の百姓を騒せ陛下をも驚し奉ん唯這方より推羅て金聖王后と
取回し来ん但知に彼山洞をの行程計ら有やん國王曰く寡
人曾て那里の里數を聴み往來五十餘日及少二千餘里あり行者聞
く八戒汝僧小向ひ你小師父を護持して爰ふあはれ我の那地小趣ん
と云を國王扯住て神僧且寛々支度し又此計の安排をも信し

擡般漚も進まべし又快馬一疋を進せん是ふ踏て旅立の行者笑て曰
く階下の命更甚巴山轉嶺步行二千里計の行程の燗酒を斟で
不冷間小往同まべし國王聞て大ふ呆れ神僧の尊貌猴の如るど
どの息生這般の法力ありや行者曰

我身雖是猿猴數
徧訪明師把道傳
倚天為鼎地為炉
採取陰陽水火交
全仗一天罡搬運功
退爐進火最依時
攢簇五行造化生
自幼打陶生死路
山前修煉無朝暮
兩般茶物團烏兒
時間頭把仗閑悟
也憑斗柄遷移步
抽鉛添汞相交顧
合和四象分時度

二氣歸於黃道間

三家會在金丹路

悟通法律歸四肢

本末勛手如神助

往來霄漢沒遮欄

一打十萬八千路

國王此詩を見て日驚き且懼ひ許交うち吟下り一杯の酒を著る行
 者小奥へ神僧遠国へ旅立ちの骨折を謝せん行者一心唯好怪を降
 伏せんと思のそめて速ふ一杯を吃し空中小向て吻嘴と一色寂然と
 して形の見ぞ一国の君臣上下唯奇異の思を做ぬ斯て行者の勛手雲
 ふ打跨て快くも一座の高山ふ到り即ち下て巔峯お在る仔細を得
 と觀ひ正小洞口を尋んと欲る處ふ只見此山の凹るる処より烘々と
 ひひり光飛出る要時ふ天を燐紅焰あり又紅焰の中ふ一條の惡烟を
 冒ひ出れば此火甚毒火と見るふぞ大聖自ら恐懼せり又此山中ふ道

の沙を迸り出ると真小天を渡り日を蔽ふ行者見んども一回お甘ん
 を解ぎて頓て身を変じて一個の攢火的鷓子と成て烟火の中お飛入
 り驚却驚駭回り烟火沙灰を吹散し衛々烟火開けて本像を現し下
 りて見を只叮叮啾啾と銅鑼のまを聴以處の是好精の曇末尤お非
 ど銅鑼のまは是兵を布の銅鑼相心のお是通国大路お兵を出はと
 有るんと猶急ぎ行る處お勿心ち一個の小女兒黄なる旗を立背に上
 り書筒を帯て銅鑼を敲ながらまを走飛ら如くする行者又身を
 変じて一個の道僮と頭を双執髻お結身お白衲衣を著る手
 お木魚を叩き口お道情詞を唱山坡を轉て彼小姑的お行迎誓
 首でりの長官那里へ行ゆや又持るお心摩の公文たるや小姑的
 銅鑼を打止笑て礼を返てりか我背上お負るの朱紫国へ送る戦書

りり行者曰く何故小戦書を送りて闘んとくもや小女的が曰く
我大王二年以前朱紫国小到て金聖王白王后を奪ひまゝり国の衆小為
んと思ひつゝ一個の神仙来て一件の五彩の仙衣を白王后におまゝる旨を
著す小の總身都て針刺を生ず我大王敢て摸ても見ん支能は但
些少も手を著すと手心疼て堪へらば此故小二年の今日日未
ご身を沾さば大王は奈何又朱紫国より外の宮女二個を要
し竟小弄を殺し其後又二個の宮女を弄を殺し今年又要小遣
を今般の孫行者が為小打破して宮女を要す未は此故小我大王
の小女彼国を責むと人我を戦書を届くめんとらる朱紫
国王若戦のどと美人を送りて和睦せば造化の戦り管を利非
我大王烟火飛沙を以て責むら彼国王臣家を首め百姓小到

ちで一個も活る者有べら其時の我大王の朱紫国の天子と為我
們の臣下と做べ然らば明日の合戦より快く戦書を届くべと云捨て
まゝ行間終て行者鉄棒を拿し出小女的が後身より唯一打小
討殺し立と把て洞へ扯下さんとする時口聽喙的一と一と金
指する牙牌落る牌上の文字あり曰く心腹小校一名有未去五
短身材抗捷臉無鬚長川懸掛無牌即假行者是を見て打突ひ此小
妖の名を有未去とよふ然る小今一棍小打殺しよ云有未去
まゝと云て牙牌を取て腰小付銅鑼と旗との草裡小藏し置戦書
を取て袖小納勿心ち又烟火の毒を思ひ出取て洞門を尋亦有未去
が敵と鉄棒小控つ着其穴中小飛升して徑小本国小飯を且
箇の頭功の手柄と賞報べると吻哨と登きと朱紫国小歸り金



きんせいこうご
金聖皇后
ひとりごちと申す
獨思古御



室殿小到り彼一封の戦書と二藏の袖の裡小推入收置て師父旦国
王小見せ多々と云終さるる小国王殿を下りて行者を迎り神僧快
く帰るひつる借妖怪の動搖の奈何行者地上小指て那階下小女精
を打殺て置つると云を国王是を見て是の這實大藏小非は實六
歳の寡人親く認得る身尺九一丈八尺計り面金光有て色霹靂
の如く行者曰く是の這一個の報争の小女的なり且血祭小打殺し未
く手始の功を告奉る国王大に歡喜で好々神僧一度出て速に功
を奏し返り来る実小神通力あり先々酒を焼めて其功を賀言ん
行者曰酒宴さると日置て我第一小階下小問奉ん金聖王自王后と別
ふ時甚麼なる表記さる取交すのいご国王表記の二字を聞よるもの
心刺る思ひて堪兼て涙下り只管泣て謂て曰く

當年佳節慶朱明

強奪御妻殊倉卒

大歳凶妖忽震聲

誰留表記繫離情

是を聞て行者曰娘々既小表記す然バ彼君宮中小在一時甚
麼身小換て愛小ひ物有べ国王曰く是を向て乍心麼ろ為や行
者曰く彼女王実小神通有て當難假今能是を為果ころと
娘々我面を認得さる朱些国の仗と云とも取て信給べうら
是小依て彼娘々平日小心小愛給ひ物一個を見を且るとて
信給べう其為小奇行國王の曰く昭陽宮の裡拵拵上
小一隻の黄金宝串あり且金聖王常小帶る死の物る彼奪とる日
を端午の節會るは續命五色の絲を臂小懸る小依て脱有
るる是の他常小愛せ目的る行者曰く然ハ其黄金串を老孫

小舎つ候へ國王遂小玉聖宮小人を遣はし是を取出させ見せし国
 王勿ち疲下り最愛や娘々と幾き位て遂小行者小途典のり行
 者是を辟月小懸て功賞の酒由呑は勅斗雲小打跨て吻吻と一色
 又去て麒麟山へどまり到る頃て洞府を尋る小只人語の喧嚷を聞
 け立て情と疑し觀看を原末辨身洞門の口ゆて大小の頭目あり
 物摸五百名餘りて爰小座て保守居りて行者是を見て頭回し舊
 路小到りし御向小好的を打殺する如小到り黄たる旗と銅鑼を披し
 出し却ち身を変とて右末右去が像と做徑小前を行辨身同小到
 此を握々出てり小右末去你回りて来りて行大王の剥皮亭上
 小在て你を等々の行者又銅鑼を鳴ると一の門を入勿ち頭を擡て
 一座を見れば八の窓明り小と亭子の中間小一張の餞金の交持あり倚

子の小端座する鹿王あり生得悪像あり行者見るがう傲慢ありと
 此の礼をも做む外看し口を管銅鑼を敲き居る妖王問て曰く你
 来しと云ども行者答む又問て有末去你来しと云ども尚答む
 妖王堪兼て上前出扯住めて曰く你心度答むや行者曰く元
 来我不去と思ふと大工却て那里小我を遣はし行て見小限ら
 き人馬陳勢を張て我を見しより推つ扯つ遂小控て城の内小控
 せ彼國王我を見て則ち斬んと云ふを幸小両班の謀士ありて曰両家
 相争時来使を斬むと遂小我を饒し戦書を收て城門の外小押
 出し二十杖鞭打を今放しを還り候小斯動静小ては遠らば那里
 逆寄小まり戦へば妖王曰く然を彼国多少の人馬ありや行者曰
 く我甚し誑き昏て爰の人の馬有し深く覺は唯彼国の兵番

本林々と羅列する支那の生らるる如く妖王突て曰く假令那程の兵
 有り我宝貝紫金鈴と打擡て烟沙火を飛し彼国を塵塵の為
 へきらう你の今より後宮の往て金聖娘々々報ん小言べき事あり
 他既小我彼國を責人と云を聞て位悲心にて在るの你往て今見て
 まゝ通る彼国人馬驍勇ゆと音以此国小勝んとり且々一時他
 心と實をわくし行者聞て為備らうと思ひ此支十分中意として則ち脚門
 を通廳堂と越見れば遠征て大厦高堂以前邊の摸樣とい大小替
 まり直の後邊の宮裡小到むを宮門の仕業する是則ち金聖娘の住
 たる裡小入て見れば兩班の好狐好鹿個々都て美女の形小蒙下粧
 ひて左右小侍立せり中間の金聖娘々手づらら香腮を托げ双眸
 滴波果然の玉容寂寞胭脂冷雲鬢蓬鬆翠黛空自古江

顔又薄命懽々無語對東風行者上前て言面平んと云を金聖娘々
 の曰く遠俗怪的十分無礼なり思ふ我今やで這様なる怪のを見
 る是是怎麼なる野獸なるや衆婢上前出ての娘々怒りを止る人他
 才見大王爺々腹心の部下名の有未去と喚的り今般朱紫國へ
 戦書を送るもの使小行りる金聖此二怒りを刃心問ての你戦書を
 下て曾て朱紫國へ到りや行者曰く老孫戦書を持って往け金聖殿
 小到り面頭国君小見候ふ金聖曰く你国君小見えて君王何と曰
 ひぞ行者曰く彼戦鬪の支の既小大王の報上りり婦人小聞え上
 る小及む唯那君王娘々の支の思想言傳の一言面平上り然り
 右左の人の聞を奈何金聖是を聞て兩班の好狐好鹿を退け行者
 を近着る人む行者前倚て本像を現し金聖小向て曰く娘々我を怕

此の如く我の是東土大唐より西天の往て仏の見え経を求むる和尚の
 て孫悟空と呼做す我師父の國中を過る依て関文を擲んと
 せし處の你的女王の掛来しものひきまを問国君の夫の依て一般尊
 躬を救ひて国を敵し進せんと依て彼使者有来去と變ふと爰に
 至り候ふとの金聖高沈吟して疑き面色を行者那宝串を取
 出し進せりゆの金聖目より涙を登々と流し座を下りて拜し長老
 果して我を救ひ国を敵し進せんと大思死とも亡心べしは行者曰此
 くの故心有べしは但し此国に有處の火を放ち烟を出し汝を降し
 的是怎麼の寶貝を金聖曰那の是三箇の金鈴より彼一箇を持
 打揺を二百丈の火光登て人を焼し二を揺を二百丈の烟光登て人
 を熏らば第三を揺を二百丈の黄砂人を迷し烟と火を還て不打緊

と雖も唯彼黄沙取人の妻あり倘鼻の孔に入時の乍ち命を失ふる
 了行者曰く利害利害我曾て斯る鈴あるを知ら其金鈴今何
 處に有や金聖曰く如然の宝貝見るとは大王常し腰に帯して行住座
 臥身を放て行者曰く你倘故御へ還し思ふらば刃心て大王の心は
 從ひ欺して彼金鈴を預りぬ我是を取置くと後你を国を敵とす
 一金聖問て是理なり我鞋他を欺て預るべしと惟喜して這詞に従ひ
 りの行者の原の有来去と變ぐ左右の侍婢を呼出せば金聖態と有
 来去早く大王を請じ来し登と應て行者則ち剥皮亭に到り女王
 に向ひて曰く大王今日も娘々万望王尊臨を願ひぬるは女王大に
 小惟喜で曰く娘々常し我を聖言と喚く怎麼も今日斯く親來
 我を招くや行者曰く彼朱紫国の吏を問ぐは故我態と偽つて彼



欲奪寶
 貝金
 聖妖怪
 進酒



國王最早別小白皇后を冊きて寵愛盛んらうと説話候へた娘々今ハ
慕ふ心も没果て直小我小命て大王を請ふ奉らうり女王是を聞て
惟喜你の實小大切的らう我彼国を得ば你を以て太宰と為べ行
者此言小從ひて因心謝し夫らうり女王と俱小後宮小到せば金聖有
歡顔色小出迎へ手を把て相控らうり女王曰く亦娘々の身小障
我身の疼んまを怕らうらと云べ金聖王曰く怎麼這樣のまの口ハ
や旦座小請らう我君小説話あり大王我を愛らうり又久と雖も示
ご枕を傷ふせざる其仔細ハ我朱紫国小在り時を外国より首物其
外何小依に大王先看終て我小由看せ我預て收め置まらうり此
国小も三箇の紫金鈴と云る寶貝ありと因ぬ大王我小を為見小
給らうり看せ給らうり況や尚預らうり借老の勢を假我小悪小

ふら然とて薄情ハ此故小我尊意小從は男とりめ者を疑ひ深き者
らうと恨位て曰ひくまば女王忽ち軟腰と成態と大り小笑て曰く娘
娘音に恨るまらうり我宝貝の腰小着て則ち這小有今日當小你
小收預べと則ち衣を掲て鈴を把出まを行者の後邊小在り暗も
轉ぎ看看居り女王兩三層の衣服を掲起て三箇の金鈴を取て
些の本綿を以て口を塞ぎ一箇の豹の皮の包袱見小包も金聖小
妻て曰く能々心を用て藏め置らうり必し是を搦らうり金聖王曰く
受取て我良納處ありとて化粧殿の上小藏置小的と呼で酒肴を
安排しまらうり金聖王の増々好焼らうり魅さる女王小着精靈行者
其間小粧臺小近き彼二箇の金鈴を拿て軽々と持出宮門を
出て剥皮亭の前らうり人無處小到り豹の皮の袂包を置き見茶鐘

の大小さるる金鈴三箇あり本綿の裁布を以て其口を塞ぎしる行者
利害も知れば彼本綿の塞を三箇一箇ふ扯りしを乍ち一色の
響音有て烟少火の三箇の的一齊に遊る悟定急小是を収る支知
む亭中烘々として火起つて紅光天地小耀けを小姑的周章大王
小告まる姑王驚き飛ぶ来り能々見を有未去金鈴も泣血未と美
小在妖王大い怒り己賤奴大膽我寶貝を泣血する小的の咄
拿よと呼びしを小姑的の者ども是を同一齋ふ打てかゝる行者
と金鈴を投捨て本像を現し金箍如意棒を擧て打て廻る妖
王の寶貝を取收て門々と厳く閑固道ごと取巻るを行者の道
に出る小道々鉄棒を收め身を寝ると蒼蠅見とるり火の魚鹿の
壁上下住り其動静を伺ひしる小姑的行者を見失ひ隈々を尋ね

捜せしも不知妖王是を閉て斯門々を緊く鎖る小那死より逃矢
々や抑渠の那的のを大胆めも有未去と愛ふと我小生れ自
の返香を告揚小衆ごと寶貝を奪るるや既小遠山の上小在て烟火
を放ち風小吹るるまらるる我逆も當るる先鋒白文豹が曰く是
定是の孫悟定るるる想ひ必ま路の上小有未去小遇着彼を殺
し銅鑼と旗とを奪ひ取然と有未去小夢をまり大王を欺く由
の多らん妖王是を閉て點頭正是正是你云死有理ありと小姑
們ふけて仔細と尋ね捜せし門々取巻く保守せり



繪本西遊記三編卷之七 池清

